

## ヨーロッパ随想



昨年六月より約一ヶ月間、日本代表として電気加工の国際会議に出席するためヨーロッパに渡った。開催国のスイスに行く前にイギリスに

立ち寄ることにした。ロンドンのヒースロー空港は用心が悪いと聞いていたが、在外研究中の大鉢先生一家の出迎えを受け、心強い。新聞の投書欄にも、家族連れで米国に留学した先生が、アメリカを引き揚げヒースロー空港に着いたとたん、小切手、通帳の入ったバッグをかつぱらわれた記事があった。海外旅行では、病気もさることながら、お金とパスポートには特に要注意。一人旅ではなおさらである。命の次に自由圏ではお金、共産圏ではパスポートという話である。

ロンドンではエリザベス女王在位二十五周年記念でにぎわっていた。さすがに英語の本場だけあって、こちらの怪しげな英語でも日常会話はスムーズに進行し、乗物、食事、買物すべて順調であった。たぶんロンドンっ子は世界各国の人々に常に接しているの

で、ブローケン・イングリッシュに慣れているせいであろう。「英国ではジャパニーズ・イングリッシュが通用する。」

## 元 木 幹 雄

英国で鋭気を養った後、本番のスイスに向かった。国際会議場は、チューリッヒの近くのコンスタンス湖畔のウォルフスバークにあるスイス銀行研修センターである。普通の地図には載っていないようなへき地で、もちろん地元参加者は別にして、他の研究者は全員泊まり込みである。放電加工の研究成果を一席ぶち上げるとともに、各国代表者会議で日本側の意見を述べた。国際会議での講演は、これで五度目で、そのうち二回は日本代表となった。いずれにしても、朝から晩まで、まる四日間の会議にはけっこう疲れた。

講演は、参加者に論文集が配布されており、スライドを入念にわかりやすく作製したおかげで、ブローケン・イングリッシュでも相手に通じたようである。りっぱな研究業績ほど聴衆は深い関心を示すから、国際会議での講演をそれほど恐れる必要はない。公用語が二ヶ国以上で同時通訳のある場合は、通訳者に講演要旨を先に渡しておくことが肝要である。文部省編の学術白書でも、国際会議での講演回数、外国学会誌に対する掲載論文数を調査しており、国際的な研究活動がわれわれに要求されている。積極的

に世界の学術の発展に貢献しなければならぬ。「国際会議での講演成功の鍵は、会話力よりも研究内容にある。」

会議終了後、関連行事の会社見学を兼ねたスイス一周旅行に参加した。スイス連邦工科大学 (ETH) の教授らがガイド役を務め、観光バスは所要所要を巡る。行くさきさき町のたたずまい、尖塔のある寺院、古城、噴水、時計塔、花で飾られた民家などは、途中窓越しに見るアルプス、モンブランなどの山岳風景、湖畔の景色などとともに、魅力じゅうぶんである。日本交通公社のマイクロバスと、ところどころいっしょになったが、多少コースが異なっていたようである。古きものを大事に尊重する傾向を強く感じた。「スイスは、ご清潔。」

国際会議および関連行事すべて無事に役目を果たせたので、ユーレイル・バスを使って欧州国際特急列車 (TEE) でベルギーに行く。国際協同研究の連絡のためルーバン・カトリック大学を訪ねたが、イギリスで見学した二、三の大学と同様に、ここでも敷地が広々として構内に余り人影を見ない。なにかしらゆつたりとして、着実に、かつ力強く研究を推進せんとする研究意欲が渾然とわいてくる。

ヨーロッパでは夕日の沈むが遅い。余り暗くもないのに、ふと時計を見ると、もう九時をだいぶ回っている。日本と日没時間が違うので勤が狂ってしまう。その結果、つい就寝時刻が遅くなり、睡眠不足になりがちである。また、夕食を食べやすくなり、列車の乗り遅れ、個人宅での長居などの失敗を招きやすい。日の暮れないうちに仕事をして、暗くなると休養の生活ペースを

時間的に少しずらす必要がある。「明るいうちに夕食を。」

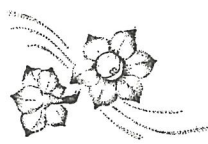
ベルギーからオランダに出た。アイントホフエンのオランダ工科大学で国際協同研究の打ち合わせをした後、首都アムステルダムに行く。中央駅前の観光案内所をのぞくと、日本語で書いた盗難注意の掲示が目につく。ここでも日本人はカモにされているらしい。いままで回った各都市で気づくのは広場の存在である。人々が広場に集まっており、その雰囲気からなんとなくその土地の性格がうかがえる。アムステルダムのダム広場は、若者が群がって活気にあふれ、開放的である。広場でたばこも吸いながらぼけっとしていると、このうえない気分転換になる。「広場は都市の縮図である。」

ユーレイル・バスの期限も切れたので、文明の利器の助けを借りてパリに飛んだ。七月上旬でまだ時期が早いのか、余り日本人を見かけない。そのせいか、日本人店員が街頭に出て、日本人と見ると店内に案内して、ファッション商品を売りにかかる。ルイ・ピトンの店に日本人が殺到して批判を受けているが、ファッションはパリからも、ぼつぼつ神話になってもよいのではなからうか。それにしても、一人旅でもう一ヶ月になるのに、少しも退屈しないのは不思議である。「日本人の少ないパリは気が抜けた感じがする。」

日本に帰ってから半年が経過した。オランダみやげのチューリップが、この春、わが家の花壇に咲き誇るのを楽しみにしながら、再来年のポーランドでの国際会議講演を目標にして、研究に励んでいる日々である。

(大学工学部教授・応用電気工学)

## わが青春のハワイ



私が育ったころのハワイは、現在とは非常に異なったものだった。暮らしては、平和で調和があり、毎日がゆっくりと過ぎていった。こんにち新聞の紙面をにぎわすような犯罪は、めったに起こらなかった。ハワイは、かつて太平洋の「るつぼ」と呼ばれたし、現在なおそのとおりである。たいがいの方は、そこで働き、そこに骨を埋めるつもりでやってきたのである。すべての人々は、互いによそ者同士であった。新しい人生というわけで、誰も彼も仲よくしようと努め、必要なときに喜んで手を貸そうとした。

私はさいわいにも、教育、宗教、社会福祉について高い理想を抱いている家庭に生をうけた。両親は熱心な仏教徒だった(父はホノルルの浄土宗の信徒総代だった)。けれども、子供たちは自由に自分の宗教を選ぶことを許されていた。その上、なお、両親は子供らに、勉強したいと思うことは何でも勉強するよう機会を与えてくれた。自分で学んだものは何であれ、それはその人の内的生命の一部ないしは財産となるのであって、これは何びとも奪い取ることのできないものなのだ、と両親はよく話して聞かせたものであ

る。

母は非常に寛容な人で、日常生活においてはアメリカの習慣を大いにとりいれていた。けれども、伏見のお茶の卸業者の出であり、「寺小屋」で学んだことのある彼女は、古くからの家の習慣を保持し、受けついでいくことに全力をつくした。毎月のついたちと十五日には、おこわとおなますが食卓に供えられたし、神棚、仏壇の榊やお花はきちきちと取り換えられていた。ふつうはアメリカ風の食事だったが、ある特定の日には、特別の日本食がそえられるのだった。私の長兄が日本生まれだったため、母は彼の「氏神様」をまつっていた。お盆がくると母はおはぎを作り、それをうちの店で使っていた人々や近隣の人々に分けてあげるのであった。

日本からやってきたホノルルの住民たちは、山口県人会とか大島郡人会といったふうに、出身県や郡をもとにして会を作っていた。このような会は会員のためのピクニックを計画したり、遠足を主催したりした。そのような行事の一つは、カピオラーニ公園での運動会で、この日にはすべての人が賞金つきのリレー競走、

相撲、その他の競技に参加するのであった。こうした行事は会員を団結させ、共同体意識を植えつけるのに力があつた。けれども関西出身の私たちには、そのような大きな楽しい行事を催すことができなかった。つまり、関西出身者はたった三家族しかいなかったからである。私たちは寂しい思いをした。だから、ときどき「日本音楽鑑賞会」と称して互いに訪問し合う程度で満足しなくてはならなかった。私たちは、琴と三味線の二重奏に、尺八、ピアノ、バイオリンの伴奏をつけたりした。小唄や長唄もやったし、ピアノにバイオリンを合わせた。このような懇親会はいつも楽しいものだったけれど、それでも私たちはカピオラーニ公園に行つて、よその大グループのはなやかな運動会に入れてもらえないことが残念だった。さいわい私だけは、一度うちの店で働いていた人の家族といっしょに連れていってもらつたことがある。それはちょうど日本の学校の運動会そっくりであった。

盆踊りは、非常に人気のある夏の催しだった。それは特に田舎で働いている人々に人気があつた。老人たちが日本でのやり方を思い出してふんい気を高め、できるだけ祭りの気分を盛りあげるようにした。このようにして習慣が若い者に引きつがれていった。私もそのようにして日本流の娯楽や楽しみのいくつかを覚えただのである。

ハワイにはむろん、そのほかの祝・祭日もあつたのである。クリスマス・イヴと大晦日にはホノルルの商店街は買い物をする人や遊ぶ人でいっぱいになった。お祭りのふんい気をもり上げるために、通りは色とりどりの電燈で飾られる。多くの人々は仮面を

つけたり、パーティー用の帽子をかぶつたりして、互いにあいさつの言葉を叫びながら、色テープや色紙片を投げ合つたりする。家に帰ると、一面に紙片が服についていることがわかり、それをすべてはらいおとすのは相当な苦勞であつた。午後十時ごろになると、教会の礼拝に出席するために急いで帰宅しなければならぬので、人々はだんだんと散っていく。大晦日には、夜の零時きっかりにサイレンが鳴り、ベルが鳴り、お寺は鐘をつき、大、小の爆竹がひびきわたる。それはとても美しいけれど、又とても騒がしい。せっかく掃除の行き届いていた庭が、色のついた紙片で又もよごされるのだ。しかし、それは年越しそばを頂く時間である。元日になると、父はフロックコートと山高帽の正装で、新年の式典に出席するため、日本領事館に出かけていった。私たちが若い者はフットボールの試合を楽しんだり、映画に行つたり、年始に出かけたりした。学校も、会社も、ふつう一月の二日か三日にはもうはじまるのであつた。

復活節は一週間ばかりの休みがあるので、すばらしかった。それは新しい帽子と新しい服を着る時であり、復活節前の金曜日と復活節の日曜日には教会に行つたし、又、パンチボウルで行われる復活節早天礼拝にも参加した。そのパンチボウルは、現在では第二次世界大戦で生命を失つた人々の墓地になつてゐる。

その次にはメイ・デイがくる。ハワイではむしろ「レイ・デイ」と呼ばれることが多い。この日にはだれもがレイ（花輪）をつけて花のショウを見に行く。人気投票で選ばれた花の女王とその美しい供まわり、そして人気のある若い美女たちがこのショウに

登場するのである。

今と同じように、その当時でもハワイは西洋と東洋の中間に位置していたために、世界貿易に独自の地位を占めていた。太平洋のあらゆる港から船がやってきては、遠い国々の産物をおろして行った。その上、船はあらゆる分野の人々を運んできた。ハワイは日本からの旅行者の必ず立ち寄る島であった。この人々がもたらしてくれた、胸のわくわくするような楽しみや活動は、無限にあったといつてよい。歌手では、関屋敏子、三浦 環、藤原義江によるコンサート、田中絹代や水谷八重子の踊りを含む芝居、有名な手品師天勝のショウ、などを思い出す。その上なお、福音主義の社会改良家賀川豊彦の演説会があったし、一燈園の西田天香による早朝ボランティア活動に参加する機会もあった。

特に興奮が高まるのは、練習艦隊や商船学校生徒が毎年やってくるときであった。この訪問は、ハワイの日本人たちに祖国の生活と味わいがありと呼び起こさせる機会だった。船が日本人に開放されるときうれしき。私は少尉候補生として練習艦隊に乗り組んではじめてお見えになったときの高松宮をまぎまぎと覚えている。父が語ってくれたところでは、総領事に先導されて代表団が宮にあいさつに伺ったとき、宮は汽罐にシャベルで石炭をくべておられたところで、お顔には石炭の粉がついていたということである。翌年、高松宮は妃殿下とご一緒に新婚旅行の途中、立ち寄られ、お祝いの宴が催されたのであった。私にとつて特に忘れがたいできごとは、秩父宮と結婚されることになった、松平大使のお嬢さんである松平勢津子さんのために、大歓迎会が開か

れたときのことである。

今上天皇が皇太子だったころにヨーロッパに行かれたことがあったが、そのお召し鑑長をつとめた漢那元海軍少将が、「実業のハワイ」の社主兼編集者だったトヤマ氏の客として、ハワイを訪問されたことがあった。少将はご自分の経験について、また婚礼の式典を終えられたばかりの天皇についてお話をされた。私は一週間ばかり、少将のお嬢さんの幸子さんといっしょにすごし、日本についてたくさんのお話を学んだ。そのとき、私は日本を非常に身近かに感じたのであった。

ろうけつ染め、人形づくり、リリヤン、盆景、砂絵といったような手工芸を教えるために、多くの人が招かれたものであった。残念なことに、そういった先生たちのヴィザは半年間で切れるため、講習会は長続きしなかった。ついにながら、つい最近になって、私は盆景、砂絵等の教授が行われていることを知った。おかげで、私はかつての楽しみを今再び味わっているのである。私の昔の先生で、盆景の学校を作った毛利夫人は、よわい百歳にちかく、東京に住んでおられる。

ハワイの学校では、日本のようにしばしば休日があるわけではなかった。たまの休日とは、五月三十日（戦没将兵記念日）と十一月十一日（第一次大戦休戦記念日）くらいで、パレードがあり、たくさん学校から代表が集まってきて、陸・海軍といっしょに行進した。しかし、夏休みは長くて、多くの学生はパイナップル工場でアルバイトをし、大学の授業料分くらいは優にかせぐことができるのであった。私はふつう、夏には他の島々や日本への旅をする

ことにしていた。日本にはじめて渡ったのは一九二一年、小学生のとき、シベリア丸で十三日間の船旅だった。ハワイに帰ってきた翌日、私たちは東京に大地震のあったしらせを聞いた。それに会うことなしにハワイに帰られたことは、なんとさいわいだったことか。

熱帯地方に住んでいるためか、精力にあふれた若者たちは各種のスポーツにはげんだ。野球、フットボール、バレーボール、テニス、 Polo、ゴルフ等で、波乗りや水球はもちろんのことである。しかし、彼らはまた大事な学校行事にも参加した。高校と大学を通して、私は日本人学生会の会員だった。このグループは、他の多くの類似のグループと同様、同じ文化的背景の人々と知り合うための機会を作ったし、またさまざまな人間に理解を促進させる働きをした。ドラマのグループもあった。日系の男の子たちの白馬会、同じく女の子たちの若葉会が共同で毎年劇を上演した。たとえば、「膝栗毛」や「親鸞」、それにいちばん人気のあったのが「忠臣蔵」だった。日本から送ってきた脚本は英語に訳された。私たちは日本の専門家から、身ぶりや衣裳などについてコーチを受けた。背景、衣裳、身ぶりは純日本式ながら、言葉だけが英語、ということであったが、芝居はそのままだれにも理解され、大いにはやされたのであった。もう一つのクラブは日本文芸の会だった。わけでも、私は芭蕉の句を勉強したことを思い出す。ハワイ寮を寄付されたりチャード・アサトン氏は、私たちの会のために、時おり、ご親切にお宅を開放してくださいました。あるとき、私は能についてレポートを書かなくてはならなかった。そ

れはむずかしい課題だった。というのは、私は日本で能を見たことはあったけれど、能の複雑な様相の多くを理解することは困難だったからである。

さいわいにも、私は同志社に関係のある人々にたくさん出あった。しかし、私自身が将来、「その一員」になろうとは夢にも思っていなかった。私の兄弟の友人たちが交換学生として日本に行っていたので、彼らを通して私は日本のことを多く学んだ。ハワイ寮の最初の舎監であったコルバート・クロカワ氏が家族連れでこちらに滞在しておられたとき、私はお訪ねしたことがある。クロカワさんは日本に来られる前にYMCAでジョン・ヤング先生といっしょに働いておられたことがあった。そのヤング先生がのちほど、長い間、ハワイ寮の舎監をされたわけである。同志社で学び、ハワイ寮に住んだことのある私たちの親友の中には、サカマキ兄弟、トーマス・フジワラ、私の同級生のミノル・シノダがある。ときどき日本を訪れるたびに、この人たちをたずねることは、私の楽しみであった。

かつて同志社から四人の学生がチームを組んでホノルルにやってきて、英語の演説、討論会に参加したことがあった。その一人の野井氏は同志社女学校で学んでいた私の友人ミサオと結婚した。残念なことに、野井氏は早くなくなり、今は未亡人とお嬢さんが伏見に住んでいる。かつて同志社教会の牧師であった堀（貞一）先生はヌウアヌ教会の牧師であり、私はその教会に弟と一緒に出席していた。同志社の元総長原田（勉）博士はハワイ大学で教えておられた。そのお嬢さん方は私の級友であり、友達であっ

た。原田先生の末の娘の文さんは、今は「日布時事」の主筆、ソガ氏の夫人である。ハワイからは後藤牧師、ルース・ドド夫人、ウッド夫妻が日本に来て、同志社大学で教えられた。

このようにして、私たちは日本人や、日本の文化とたびたび接触し、しかも日本に旅したおかげで、両親の祖国に対する関心と愛がかきたてられたのであった。その結果、私の兄弟二人は日本で勉強することにきめた。一人は商業学校に入って、父の仕事のうちの日本部門を引き受ける準備をした。彼がそろばんを使うのは、たしかに私たちにとって驚きであった。もう一人はハワイの

大学で二年間をすませたのち、早稲田大学に移り、そこを卒業した。東京時代に彼は日米ホームに住んでいたが、これは国際精神にみちた教育家、新渡戸博士がはじめたものであった。

理解があり、寛容であって、日本の伝統プラス、アメリカの生活という、このように豊かな背景を与えてくれ、しかも東と西の出会い所に生活の場を見い出してくれたのは、私の両親だった。その両親に感謝せざるをえないのである。

(女子中・高教諭・英語)

(訳・北垣宗治)

## 星名泰元大学長をしのんで

——先生とラグビーとわたし——



星名先生とわたしとの出会いは、昭和二十三年、同志社今出川グラウンドでのラグビーの練習中に先輩に紹介されたときでした。すでに白髪が目だった先生が、「シューアークヤッチがラグビーの基本です」とだけおっしゃったのが、わたしの耳にまだにこびりついていきます。今から考えると、ボールもまともに受けられないで、何が

岡 仁 詩

ラグビーか、ということだと思えますが、それから三十年、ラグビーの指導者のはしくれになったわたしが、「シューアークヤッチ」を、高校生から日本代表選手にいたるまで言い続けています。

先生は、京大ラグビーがその歴史の中で唯一の全国制覇<sup>は</sup>を果たしたときの主将で、日本ラグビー史の中でも、国際級のセンタースリークォーターとして最右翼にあげられる名プレーヤーでした。



信州菅平の全日本合宿での星名先生（＝写真中央、1975年）。  
 一 向かって右側は、金野滋日本ラグビー協会専務理事（校友）。左側は筆者。

京大卒業後、満州におられたので、わたしはラグビーの駆け出しにはすでに伝統的な名プレイヤーと映っていただけに、その先生の話を直接に聞いたということで、感激したのを思い出します。

わたしの学生時代、週に一回は寺町三条の喫茶店スマートで、先生にコーヒーをごちそうになりました。同志社から愛用の自転車で往復されるのです。喫茶店にしても、あちらこちらとは行かれないで、ここときめたらそこだけであり、先生の一徹さの一面を見るようでもありました。わたしが同志社へ勤めてからは、お昼には鳥丸今出川のクロバーで中華そばとコーヒー。そして果てしないラグビー談義と、その中でおりにふれ人生訓を聞かされま

した。先生のコーヒー好きは有名ですが、味についてはやかましくなく、ただ、インスタントはきらいで、ラグビーの合宿ではじめて信州の菅平へ行くときに、「そんなところにコーヒー屋があるか」とまず聞かれるほどでした。先生をおしのびするときに、コーヒー抜きには語れませんが、今、それがすべて過去形での表現であることに、ふと胸の痛みを感じずにはおられません。

ラグビーは create と challenge の競技であるといわれますが、先生のラグビー理論の組み立ての姿勢は、まさにそのものでした。ラグビーを徹底的に分析し、あらゆる可能性に実戦的に challenge することにはじまり、そして個人のプレイ、チームの戦法を create して新しい理論を構成されていかれたのです。ときには奇をてらっているかのような批判をうけることもありましたが、先生の開発された技術は、三年後から五年後には、必ず、広くどのチームにも採り入れられ、日本のラグビーとして定着してきています。世界のラグビーに十年の遅れを持つ日本ラグビーが、おそまきながら追いつこうとする原動力は、星名先生であったといえます。一九六四年のラグビーの画期的なルール改正のとき、peel off play というのがどのようなプレイであるのか、日本のだれもがわからず、新しいルールの解釈に困ったことがあります。ある日、先生から「すぐに来い」と電話があり、とんで行きますと、先生は、にこにこしながら一冊の洋書を開けてわたしに示されました。そこに peel off play が描かれていたのです。“Modern rugby” という英書でした。日本ラグビー協会が英国へ問い合わせ、日本ラグビーの遅れている恥をさらさずに済んだのです。



今、peel offという言葉は、ちびっ子ラグビープレーヤーたちも当然のように使っています。近年、世界のラグビーのトップの指導者たちが、ラグビーの principle を 1. Go forward 2. Support 3. Continuity 4. Pressure と説明していますが、その何たるかを日本に紹介されたのも先生でした。最近のラグビーのテレビ放送で、アナウンサー、解説者ともにこれらの言葉を盛んに使っているのが聞かれます。また、わたしが日本チーム監督として海外遠征したときに、対戦チームの戦力をほとんど分析できていたのも、すべて先生の資料によるもので、おかげで、選手たちからわたしが非常に信頼されたことも忘れられません。また、先生のラグビーに接しられる態度として、「フェアプレイ」の精神が強く貫かれていました。技術的な反則はあり得るとしても、不行跡な反則は絶対に許されなかったのです。わたしの学生時代、その不行跡の反則を犯したために、試合の出場はもちろん、練習まで停止されたものがありました。彼はその当時の同志社のエースでもあり、チームとしての戦力低下ははかりしれないものがあつたのですが、先生は断固として許されなかったのです。そのシーズンをほとんど棒に振った彼は、最上級生になるにおよんで、名実ともにチームのエースとなり、日本代表選手にまでなりました。先生は選手に敵しいだけでなく、指導者として自分自身にも非常に厳しく、練習中一度として坐られるようなことはありませんでした。三時間近くもです。そして、あれだけ好きなたはこも、練習中是一本も口にされなかつたのです。入院される寸前まで、岩倉のグラウンドでのその姿勢は変わりませんでした。先生の強い意

志力が伺えると同時に、わたしは指導者のあるべき姿を教えられたと思つています。同志社ラグビーの卒業生たちが、社会人の一流チームの指導者として数多く活躍しているのは、先生の理論指導とあいまつて、このように身をもって示された敵しい態度に育てられたといえます。

六十五歳で自動車の運転免許をとられた先生は、老年の健康法として、①体力は散歩とグラウンド通いで、②反射神経は自動車の運転で、③頭脳の回転はラグビーの英書翻訳で老化に対され、実にスポーツマンらしい万全の健康法を心がけておられました。満州で世界に誇る特急アジア号を走らせたエンジニアとしての先生、ラグビーのプレーヤーとして、また理論家としての先生、先生の送つてこられた人生の二つの柱を、老後においても生活そのものとして過ごされたことは、まさに Going my way の人生だつたといえると思ひます。

長い間、古い型のブルー・バードを運転されていましたが、今度買い換えるのはあの車がいい」といわれたのがセリカでした。クラウン、セドリックでなく、スポーツ・タイプの若者の車を望まれた若い気持ちの先生、最後まで、ラグビーと同じく、人生に challenge し、create していく積極的な姿勢を持ち続けられた先生、理想のスポーツマンとして、わたしたちの心の中に永久に生き続けられることを信じて、筆をおきます。

(大学文学部教授・休倉)